

東郷語(ドゥンシャンゴ) 中 Dōngxiāng,

露 дунсянский язык

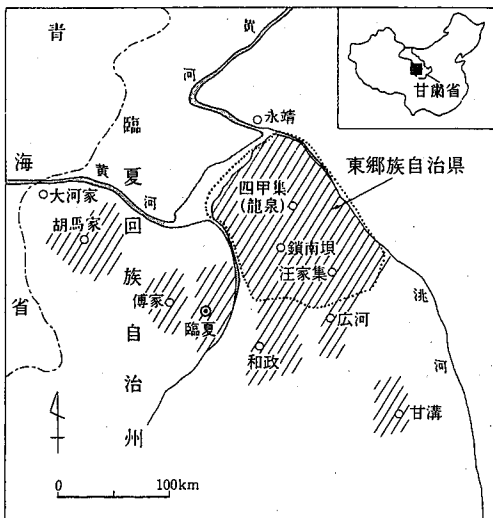
露 дунсянский язык
 中国の甘肅省、臨夏回族自治区を中心に居住する東郷族によって話されているモンゴル系の言語。別名、サンタ語(英 Santa)。独自の文字をもたない。大部分が中国語との二言語併用者で、書記には、漢字(中国語)を用いる。東郷族はイスラム教徒で、人口は 279,523 人(1982 年の統計)である。東郷族の人口がもっとも集中しているのは、上記自治州内の東郷族自治州で、ここに約 13 万 2 千人が居住する(く図)を参照。

民族名の東郷([tuŋɕiaŋ])は、かつての行政区画「(河州の)東の郷」をさす中国語による。別名のサンタ([sant'a])は、東郷語で「イスラム教徒;回族」を意味し、中世蒙古語の sarta'ul「回教徒」と同源とみなしうるが、現在では、民族名の自称として用いられていない。言語名の自称は、duŋɕiaŋ kielie [tuŋɕiaŋ k'ie-lie] である。

イスラム教徒であることから、かつては、漢人側から東郷回回、蒙古回回などとよばれていた。また、訛毛というのは、イスラム化したモンゴル人とチベット人をさした俗称であるが、東郷族も、これに含まれていたと考えられる。

1884~86年に、青海・アムド(Amdo)地方を旅行したロシアの探検家ポターニン(Г.Н. Потанин)は、この地域のモンゴル語系言語の語彙と表現を採録して、

く図) 東郷族主要分布地域



出典:『東郷族簡史』(1984)による。

いわゆるシロンゴル・モンゴル語として紹介した。ここでは、シロンゴル・モンゴル語の一部として、東郷地方の言語の語彙 160 余が記録された。しかし、その後は、長らく調査、研究が及ばず、この言語の実態は不明のままであった。

1955~56年の中国中央民族学院等の言語調査によって、ようやく、音韻と文法、基本語彙の概要が明らかになり、モンゴル語族の中で、独立した一言語として位置づけられた。当時の言語調査の成果は、トダエフ(B. H. Todaeva 1959, Б. X. Тодаева 1961)、ナスンバヤル(Nasunbayar 1961, 1976)、劉照雄(1965, 1981)らが、著作や論文として公刊している。

特筆に値するのは、1980年に、内蒙古大学の蒙古語文研究所が組織した、中国内の7つのモンゴル系諸言語・諸方言の言語調査の一環として、布和らによって、東郷語の組織的な言語調査が行なわれたことである。その成果は、東郷語の語彙集(布和等編, 1983)、口語資料集(布和等編, 1987)、および、文法研究書(布和, 1986)として刊行され、研究の新たな段階を迎えた。本項は、特に、これらの新しい資料、研究に負うところが大きい。

【言語特徴】 東郷語は、モンゴル語族の諸言語の中で、中国、青海省、甘肅省に行なわれる近隣のモンゴル語や保安語と重要な類似の特徴を共有しており、これらの言語間の緊密な歴史的関係がうかがわれる。一方、多大な言語的变化を経ており、ハルハ・モンゴル語や内蒙古語等、従来、よく知られているモンゴル系諸言語とは著しく外貌を異にするに至っている。

東郷語の外貌を際立たせているのは、主に、次のような音声の特徴である。

- 1) 母音調和がない。
- 2) 強勢が、通例、語末音節の母音におかれる。
- 3) 母音は短母音だけで、長短の対立がない。
- 4) 蒙古祖語の4つの円唇母音 *o, *ö, *u, *ü が、2つの後舌円唇母音 o と u に合流した。

*qola > golo「遠い」、*böš > boši「布」、

*sur- > suru-「学ぶ」、*süke > sugie「斧」

5) 中世蒙古語の諸文献に記録されていて、現代語の多くで完全に失われた語頭の無声摩擦音が、f, x, h 等として保持されている。この子音は、蒙古文語では表記されない。

蒙古文語形	中世蒙古語	東郷語
arba(n)	harban	haroŋ 「10」
on	hon	xoŋ 「年」
ünege(n)	hünegen	funieyaŋ「狐」

6) 閉音節の音節末にたつ子音は、n, ŋ に限られる。これらのうち、1~5は、モンゴル語や保安語にもみられる特徴であるが、6の音節構造は東郷語に独

特のものである。つまり、東郷語では、n, ŋ 以外の音節末子音(蒙古文語の b, d, g, ɣ, m, s, r, l に対応する子音)は消失したり、n, ŋ に変化したり、母音を伴って開音節化したりした。

蒙古文語形	東郷語	
mör	mo	「道」
bulaɣ	bula	「泉」
alta(n)	antaŋ	「金」
ɣal	qan	「火」
ol-	olu-	「得る」
kür-	kuru-	「到る」

7) 蒙古文語で前舌母音 e, ö に先行する子音 d, t, s に対して、東郷語では、それぞれ、口蓋化子音の dʒ, tʂ, ʂ (IPA では、[tʂ] [tʂʰ] [ʂ]) が対応する。

蒙古文語形	東郷語	
ide-	idʒie-	「食べる」
dörbe(n)	dʒieroŋ	「4」
temür	tʂiemu	「鉄」
erte	etʂie	「早く」
seri-	ʂieri-	「醒める」
sönü-	ʂinie-	「滅びる」

蒙古文語の d, t に対して、東郷語で口蓋化子音の dʒ, tʂ が対応している上の現象は、同地域の中国語方言の特徴と並行している。つまり、中国語西北方言の臨夏地域の口語では、普通話(北京方言)の [ti] [tʰi] [tie] [tʰie] 等に対して、それぞれ [tei] [tʰei] [teie] [tʰeie] 等が対応している。

8) 蒙古文語の ʒ, č, s(i) に対して、通例、それぞれ、捲舌音の dʒ, tʂ, ʂ (IPA では、[tʂ] [tʂʰ] [ʂ]) が対応する。

<表1> 語頭喉音の対応

蒙古文語形	東郷語	
k	k	
g	g	
köke	kugie	「青い」
kökü	gogo	「乳房」
ger	gie	「家」
gedesü(n)	kiđžesun	「腸」
蒙古文語形	東郷語	
q	q	
ɣ	g	
qabar	qawa	「鼻」
qola	golo	「遠い」
ɣuril	Gurun	「小麦粉」
ɣal	qaj	「火」

蒙古文語形	東郷語	
jaɣu-	dʒau-	「咬む」
üje-	uđže-	「見る」
čaɣan	tʂiGaŋ	「白い」
ačiya(n)	ačšaŋ	「荷駄」
sira	šira	「黄色い」
ɣasiɣun	qišun	「苦い」

9) 語頭の喉音に関して、蒙古文語の fortes (k, q) と lenes (g, ɣ) の対応に対する、東郷語の fortes (k, q) と lenes (g, g) の対応が、錯綜した様相をみせている(表1)。

10) 語頭の fortes (f, p, s, t, tʂ, k, q) のあとで、第2音節頭の子音 t, tʂ, k が弱体化して、d, dʒ, g に変化した。

蒙古文語形	東郷語	
kituɣa	qudoɣo	「ナイフ」
čabči-	tʂidʒi-	「たたき切る」
süke	sugie	「斧」
urtu	fudu	「長い」

文法面における東郷語の目立った特徴としては、次のような点を指摘することができる。

1) いわゆる「不定の n」は、多くの場合、語幹末で n または ŋ として保持されており、これらの子音 (n, ŋ) は、格変化に際して脱落しない。「不定の n」は、モンゴル諸語にひろくみられるもので、一群の語において、格変化に際して、語幹形として末尾に n をもつ形と n をもたない形とが交替する現象である。

2) 母音調和が存在しないことと関連して、一部の語形成(派生)接尾辞を除いて、接尾辞に母音交替による異形態がない。一般に、ほとんどの接尾辞は異形態をもたず、文法形態は単純化している。

3) 文法的な機能をもつ付属語として、中国語からの一連の借用語を用いる。たとえば、後置詞では、

ši 「～は」 (<是 shì)

接続詞では、

jeu 「また」 (<又 yòu)

xođže 「あるいは」 (<或者 huòzhě)

danši 「ただし」 (<但是 dànshì)

jauši 「もし～ならば」 (<要是 yàoshi)

終助詞では、

la (<啦), ba (<吧), ša (<啥)

[音韻体系] 母音は、i, e, a, o, u, および ɛ の6つからなる。

母音の調音的位置関係を示せば、表2のようになる。

母音 i は、dz, ts, s, dʒ, tʂ, ʂ, ʒ の直後では中舌の [i]、語頭の g, q, t の直後では後舌の [ɯ] として発音される。

〈表 2〉 東郷語の母音

	(前舌)	(中舌)	(後舌)
	非 円 唇	非 円唇 円 唇	円 唇
狭	i		u
中	e	(ɛ)	o
広		a	

siši [siʃi] 「40」, tʃi [tʃʰi] 「おまえ」, dʒida [tʃita] 「槍」; Gimusuŋ [qumusun] 「爪」, qiGei [qʷuqei] 「豚」, tiGa [tʷuqa] 「鶏」

母音 e は、語頭位置、子音 h, j の直後、および母音 i と結合する場合 (ie) には前舌の [e], それ以外では、中舌の [ɛ] として現われる。

ere [erɛ] 「男」, tere [tʰɛrɛ] 「彼、彼女」, endeyi [entɛyi] 「卵」, helie [helie] 「鳶」

母音 o は、いずれの位置にある場合にも、[üo] ~ [wo] と、二重母音のように発音される。

osuŋ [wosuŋ] 「草」, xoduŋ [xüotuŋ] 「星」

捲舌母音の ɛ は、主に中国語からの借用語に現われる。

dʒiɛ (<第二 dièr), mauɛ (<猫児 māor)

二重母音には、下降二重母音の ai, ei, ui, au, eu と、上昇二重母音の ia, ie, iu, ua がある。このうち、au の発音は [ou] に近い。

sau- [səu] 「座る」, mau [məu] 「悪い」

子音は, p, t, k, q; b, d, g, ɣ; m, n, ŋ; f, s, x, h; w, j, ɣ; r, l; ʃ, tʃ, dʒ; ʂ, tʃ, dʒ; (ts, dz, z). カッコ内の音は、もっぱら借用語に現われる。

破裂音と破擦音は、すべて無声音で、帯気と無気の違いがある。

無声帯気音 (fortes) : p, t, k, q, tʃ, tʃ, (ts)

無声無気音 (lenes) : b, d, g, ɣ, dʒ, dʒ, (dz)

また、歯茎音には、舌背音と捲舌音の2系列がある。

舌背音 : ʃ, tʃ, dʒ (IPA では, [ʃ] [tʃʰ] [dʒʰ])

捲舌音 : ʃ, tʃ, dʒ (IPA では, [ʃ] [tʃʰ] [dʒʰ])

子音 n と ŋ は、ほぼ相補的な分布をなす。n は母音の前、および前舌母音 i, e の後に、ŋ は後舌母音 u, o, a の後に多く現われる。ただし、n が a のあとに現われる、次のような例もわずかながらみられる。

duran 「満ちた」—— duran 「好み」

子音 ɣ は、口蓋垂摩擦音 (IPA では, [ɣ]) で、語頭には現われない。

子音 r は、母音 i の後では、捲舌摩擦音 [ɹ] として発音される。

ʃira [ʃiza] 「黄」, ʃire [ʃizɛ] 「机」

語の強勢は、上述のように、通例、語末音節の母音におかれるが、例外的に、語末以外の音節に強勢をも

つ語が若干ある。

bási 「虎」 bási 「布」

ʃidzi 「柿」 cf. ʃidzi 「獅子」

最後の2例では、強勢の位置の違いによって意味が区別されている。

また、強勢位置の例外として、動詞終止形の現在・未来時制の語尾 -ne は、強勢をもたない。

uđžé- 「見る (語幹)」—— uđžéne 「見ます」

音節構造は、他のモンゴル系の諸言語と比較して著しく単純化している。閉音節の音節末にたつ子音は、n か ŋ に限られる。少数の語で、子音 s が音節末の子音として現われることがあるが、その場合にも、同時に、子音 s の後に弱化した母音 i を伴った形もある。

kewosla ~ kewosila 「子供たち」

東郷語では、子音連続 sd-, sđž- が語頭に現われる。語頭の子音連続は、モンゴル語や保安語、シラ・ユグル語等と比較して少ない。

東郷語 cf. 蒙古文語形

sdasuŋ 「筋」	sudasu(n) 「血管」
sda- 「引き裂く」	tasuda- 「切断する」
sđž- 「撒く」	saču- 「撒く」

母音調和はすでに存在しないが、次のような動詞派生接尾辞に、母音交替による異形態が存在していることに、わずかながらその痕跡が認められる。

-la- ~ -lie- ~ -lo-

-ra- ~ -re- ~ -ro-

-da- ~ -džie- ~ -do-

例) ʃira 「黄」—— ʃira-la- 「黄ばむ」

tʃidže 「花」—— tʃidže-lie- 「咲く」

boro 「灰色」—— boro-lo- 「灰色になる」

前述のように、いわゆる「不定の n」は、東郷語で、多くの場合、ŋ または n として保持されている。これらの鼻音は、格変化に際して脱落しない。

蒙古文語形 東郷語

modu(n)	mutuŋ	「木」
ama(n)	amaŋ	「口」
ödü(n)	xoduŋ	「羽」
egüde(n)	uidžien	「門」

【形態】 東郷語の語形変化は、語幹にさまざまな接尾辞が付着することによって実現される。語形変化に際しては、一部の代名詞、数詞、および、一部の動詞を除いて語幹の交替はまれであり、接尾辞もほとんどが単一の形式をもつだけで異形態は少ない。

名詞には、1) 複数、2) 格、3) 所属、の文法的な語形変化があり、それぞれ、次の語尾が語幹に接尾することによって表わされる。

1) 複数語尾 (-la, -taŋ) -la は、もっとも一般的な複数語尾、-taŋ は、人を表わす名詞について、「~

をはじめとする人たち」の意味を表わす。

kuŋ 「人」—— kuŋ-la 「人々」

gaga 「兄」—— gaga-taŋ 「兄たち」

このほか、限られた名詞について複数を表わす -sla (~-sila) という語尾もある。この語尾が接尾するとき、語幹末の n, ŋ は脱落する。

otšin 「娘」—— otši-sla 「娘たち」

kewoŋ 「息子」—— kewo-sla 「息子たち」

複数形語尾は、普通、数詞で修飾された名詞にはつかない。

2) 格語尾 以下のとおりである。

主格	-φ (ゼロ)	gaga 「兄が」
属・対格	-ni	gaga-ni 「兄の, 兄を」
与・位格	-de	gaga-de 「兄に」
奪格	-se	gaga-se 「兄から, 兄より」
造格	-gala	gaga-gala 「兄をして」
連合格	-le	gaga-le 「兄と」

名詞は、語幹形のままで動詞の目的語として現われることがある。いわゆる「不定格」形である。

bi budan idžiewo.

私は 食事を した

tši doŋ daula ša.

君は 歌を 歌っ てよ

3) 所属語尾は、所有・所属関係を表わすもので、

a) 再帰所属と、b) 人称所属の別がある。

a) 再帰所属語尾 -ne は、名詞の斜格形について、所与の人や物が、文の主語たる人(物)の所有、所属であることを表わす。「自分(自身)の」と訳しうる。

gaga-de-ne 「自分の兄に」

gaga-se-ne 「自分の兄から, 自分の兄より」

gaga-le-ne 「自分の兄と」

属・対格の再帰所属形は、語幹形に -ne だけがつく。

gaga-ne 「自分の兄の, 自分の兄を」

b) 人称所属語尾は、第1・2人称では人称代名詞の属格形(後述)に等しく、第3人称(単・複)では -ni とする(表3)。

<表3> 人称所属語尾

人称	単数		複数	
	(排除形)		(包括形)	
第1人称	-mini	-bidžienni	-mataŋni	~-mani
第2人称	-tšini		-tani	
第3人称			-ni (単複同形)	

第1・2人称の人称所属語尾には、比較的速度の速い発話で用いられる次のような縮約形もある(表4)。

<表4> 人称所属語尾の縮約形

人称	単数		複数	
	(排除形)		(包括形)	
1	-miji	-bidžieji	-mataji	~-maji
2	-tšiji		-taji	

複数、格、所属の語尾が、同一の名詞につくときは、この順序で現われる。

gaga-taŋ-le-ne 「自分の兄たちと」

人称代名詞の格変化は、名詞の場合と同じ格語尾をとるが、ここでは語幹の交替がみられる(表5)。

表5で、第1人称複数の排除形(語幹: bidžien-) および包括形(語幹: mataŋ-) が、蒙古文語の排除形(語幹: ba~ma-)、および包括形(語幹: bida~bidan-) と形がちょうど逆になっていることは注意を要する。

第3人称の人称代名詞としては、tere~tere(s)la のほか、eyen~eyesla という形や、次に述べる遠称の指示代名詞 he~hela も用いられる。eyen~eyesla は、格変化に際して、語幹の交替はない。

指示代名詞には、近称(ene 「これ, この」)と遠称(he 「あれ, あの」)の区別がある(表6)。

数詞は、「1」から「10」までが本来のモンゴル語で、「11」以上は中国語からの借用語を用いる。「1」から「10」までの数詞は、ある種の数量名詞と結びつく場合に、次のように語幹が交替する。

<表5> 人称代名詞の格変化

	〔第1人称〕			〔第2人称〕		〔第3人称〕	
	単数	複 (排除)	数 (包括)	単数	複数	単数	複数
主格	bi	bidžien	matan	tši	ta	tere	tere(s)la
造格	bi-gala	"-gala	"-gala	tši-gala	ta-gala	tere-gala	"-gala
属・対格	mi-ni	"-ni	"-ni	tši-ni	ta-ni	tere-ni	"-ni
与・位格	(na)ma-de	"-de	"-de	tšiima-de	tan-de	tere(n)-de	"-de
奪格	(na)ma-se	"-se	"-se	tšiima-se	tan-se	tere(n)-se	"-se
連合格	(na)ma-le	"-le	"-le	tšiima-le	tan-le	tere-le	"-le

注: カッコ内の音は省略されることがある。

〈表 6〉 指示代名詞の格変化

	(近 称)		(遠 称)	
	単 数	複 数	単 数	複 数
主 格	ene	enela	he	hela
属・対格	ene-ni	enela-ni	he-ni	hela-ni
与・位格	ene(n)-de	enela-de	he(n)-de	hela-de
奪 格	ene(n)-se	enela-se	he(n)-se	hela-se
造 格	ene-gala	enela-gala	he-gala	hela-gala
連合格	ene-le	enela-le	he-le	hela-le

	A	B	C
「1」	nie	nie	niu
「2」	gua	guari	guaru
「3」	guraŋ	guri	guru
「4」	džieroŋ	džieri	džieru
「5」	tawuŋ	tawi	tawu
「6」	džiyon	džiyui	džiyu
「7」	doloŋ	dolei	dolu
「8」	neimaŋ	neimei	neimu
「9」	jesuŋ	jesui	jesu
「10」	haroŋ	hari	haru

~haruan

B, C の語幹は、それぞれ、次の数量名詞とともに用いられる。カッコ内は、中国語である。

B — fa 「～回」, tšiau 「～本」 (<条 tiáo), džan 「～枚」 (<張 zhāng), šuan 「～対」 (<双 shuāng), džian 「～間」 (<間 jiān), iya 「～碗」

C — udu 「～日」

なお, iya, udu は、上の数詞と結びつく際、ya, du となる。

A の語幹は、それ以外の場合に用いられる。

「11」	šiji	「30」	sanši
「12」	šio	「40」	siši
「13」	šisan	「50」	uši
「14」	šisi	「60」	liuši
「15」	šiwu	「70」	tšiši
「16」	šiliu	「80」	baši
「17」	šitši	「90」	džiuši
「18」	šiba	「100」	bei
「19」	šidžiu	「1,000」	tšien
「20」	šši	「10,000」	wan

動詞の活用形は、その意味と機能により、1) 命令・願望形、2) 終止形、3) 形動詞形、4) 副動詞形の4種類に分けられる。

1) 命令・願望形 (表 7)

命令・願望形の否定(禁止)は、活用形の前に否定の副詞 bu をおいて表わす。

bu uđže 「見るな」

〈表 7〉 命令・願望形

種類	主 語	語 尾	例: uđže-「見る」
命令	第2人称	-φ(ゼロ)	uđže 「見る」
意志	第1人称	-je	uđže-je 「見よう」
容認	第3人称	-gie	uđže-gie 「見るがままにしておけ」

2) 終止形 (表 8)

種類	語 尾	例
過 去	-wo	uđže-wo 「見た」
現在・未来	-ne	uđže-ne 「見ます」
習 慣	-dži	uđže-dži 「(いつも)見る」

習慣形 -dži は、並列の副動詞の語尾と同形である。疑問形は、過去形では -wu (<-wo+u), 現在・未来形では -nu (<-ne+u) となるほか、未来の疑問の語尾 -mu も用いられる。

uđže-wu? 「見たか?」, uđže-nu? 「見るか?」

過去形の否定は、活用形の前に ese をおき、現在・未来形の否定は、活用形の前に ulie をおいて表わす。

ese uđže-wo 「見なかった」

ulie uđže-ne 「見ません」

なお, -džuo (<-dži wo) という語尾は、時制にかかわらず、「進行」の意味を表わす。

uđže-džuo 「見ている、見ていた」

3) 形動詞形 (表 9)

種類	語 尾	例
完 了	-san	uđže-san 「見た～」
行為主	-tšej	uđže-tšej 「見る～」
予 定	-ku	uđže-ku 「見る(はずの)～」

形動詞は、名詞の修飾語となるほか、名詞と同様、格語尾をとって格変化する。

eťši-san kuŋ 「行った人」

eťši-tšej kuŋ 「行く人」

eťši-ku kuŋ 「行く(予定の)人」

mori unu -tšej -se aji -ne
馬(不定格) 乗る 形動詞 奪格 恐れる 現在・未来
「馬に乗ることをこわがる」

heni kielie -san -ni medžie -wo
彼の 言う 形動詞 対格 知る 過去
「彼の言ったことを理解した」

形動詞は、動詞として他の語を支配して、「～する(した)こと」等の意味で名詞句(節)の核となり、あるいは、他の名詞類を修飾する形容詞句(節)の核となる。名詞や形容詞と同様、単独で文を終結させるはた

らきはないが、繋辞動詞(wo, bi-), olu-, 等を伴って文を終止させることができる。

否定は、完了形の前に ese を、行為主形、予定形の前に ulie をおいて表わす。

4) 副動詞形(表10)

〈表10〉 副動詞形		
種類	語尾	例
連合	-n~ɲ	uḏže-n「見(て)～」
並列	-ḏḏi	uḏže-ḏḏi「見(て)～」
分離	-de(ne)	uḏže-de(ne)「見(て)から～」
条件	-se	uḏže-se「見れば～」
譲歩	-senu	uḏže-senu「見ても～」
選択・ 限界	-tala	uḏže-tala「見るより～, 見るまで～」
目的	-le	uḏže-le「見るために～」

副動詞は、動詞を修飾する副詞的なはたらきをする。あるものは、文を中止して等位節の述語となり、他は、従属節の述語となって主文に連なるはたらきがある。

否定は、活用形が過去の意味のときには、その前に ese を、現在・来來の意味のときには ulie をおいて表わす。

なお、動詞の語幹形が, šida-「できる」, da-「できない」, kaiji-「～(し)始める」, tšiji-「～(し)始める」等の助動詞と結合することがあるが、これも一種の副動詞とみなしうる。

bi qidei kielie šida-ne.
私は 中国語(を) 話す(語幹) できる

「私は中国語が話せる」

kai feilie kaiji-wo.
風が 吹く(語幹) 始めた

「風が吹き始めた」

動詞の態(voice)には、次のものがある。

1) 使役態: 接尾辞 -ya-

uḏže-「見る」—— uḏže-ya-「見せる」

ire-「来る」—— ire-ya-「来させる」

misi-「着る」—— misi-ya-「着せる」

2) 共同・相互態: 接尾辞 -ndu-

uḏže-「見る」—— uḏže-ndu-「いっしょに見る,
互いに見る」

ḏḏau-「咬む」—— ḏḏau-ndu-「咬み合う」

受動態を形成する特別な接尾辞はない。

動詞のうち, suru-「学ぶ」, qiri-「出る」, kuru-「届く、到達する」等、語幹が、-ru-, -ri- で終わるものは、並列副動詞語尾 -ḏḏi, および使役態形成接尾辞 -ya- が接尾する際に、語幹末の -ru-, -ri- が脱落することがある。

suru- + -ya → suruya- ~ suya-「教える」

qiri- + -ḏḏi → qiriḏḏi ~ qiḏḏi「出て」

不規則動詞として、存在・連結動詞 wo, bi-「～が(で)ある」がある。一方の wo は終止形のみで、他の活用形をもたない。他方の bi- は、終止形で bi-mu「ありうる」(推量、可能)、bi-li「あったものだ」(回想)という特殊な形として現われるほか、形動詞、副動詞の語尾をとる。その際、条件副動詞は pe-se「～が(で)あれば; (文末)～が(で)あるかもしれない」、現在・未来時制の終止形では wai-ne「～が(で)ある」となり、語幹の交替がみられる。

ene ši jaŋ wo?

これは 何 です(か)

mini niere ši abudu wo.

私の 名前 は アブドゥ です

ada-mini gie-de wo.

父は(-私の) 家に います

made baitaŋ wo (または waine).

私には 白砂糖が あります

上の動詞を否定する表現には、2種類ある。ひとつは、連結動詞(copula)としての意味の否定で, puši wo「～でない」を用いる。

he nie kuŋ lauši

あの (1人の) 人は 先生

wo nu? (または wainu?)

です か

puši wo, tere ši lauši puši wo.

違います, 彼 は 先生 ではありません

他は、存在動詞としての意味の否定で, u wo(または ui wo)「～がない」を用いる。

ada-tšini gie-de wai-nu?

お父さんは(-君の) 家に いますか

u wo, ada-mini gie-de u wo.

いません, 父は(-私の) 家に いません

made baitaŋ u wo.

私には 白砂糖が ない

なお、否定動詞 ui「～がない」は、形動詞、副動詞の語尾をとって活用する。

[統 辞] 語順は、日本語に類似しており、従属的な語句はそれを受ける語句の前に位置するのが原則である。冠詞、前置詞、関係詞はなく、後置詞を用いる。形容詞は語幹形のままで名詞を修飾し、名詞や形容詞に、文法的な性(gender)の範疇や、数(number)による一致はない。形容詞の比較級や最上級の語形変化はなく、比較は比べられる対象を奪格形にすることによって表わされる。

bi hen-se undu wo.

私は 彼 より (背が)高い (です)

文は、述語動詞を中心に構成される。述語動詞は文に不可欠の要素であり、終助詞など、文全体を受ける小詞を除き、原則として文末に位置する。主語や目的語等の文成分は必ずしも文に不可欠の要素でなく、適宜、

省略されることがあり、それらは述語にかかる従属的な成分とみなしうる。これら、述語にかかる文成分どうしの順序は比較的自由であるが、もっとも一般的で安定しているのは、主語-目的語-述語動詞の順である。

mayaši bi ada-le-ne šu-ni
明日 私は 父と(-自分の) 本を

agi-le etši-ne.
買いに 行きます

he šiešeŋ šini šu-ni oŋši-džiwo.
その 学生は 新しい 本を 読んでいる

bi ene mori-ni unu-je.
私は この 馬に〔対格〕 乗ろう

述語動詞は、補語を必要とするものと、それを必要としないものの2つに、大きく分けられる。補語を必要とする動詞の代表的なものは、連結動詞(copula)としての, wo, bi-「～である」、および, olu-「～になる」である。連結動詞が省略されて、補語である名詞、形容詞等が単独で述語となることはない。

複文では、形動詞や副動詞が従属文の述語となってそれをまとめ、主文中の文成分にかかるはたらきをする。主文の主語と従属文の主語が異なる場合、従属文の主語は属・対格形で表わされることが多い。

duŋšiaŋ kun-ni tšaŋ idžie-ku-ni
東郷 人が いつも 食べるもの(-彼らの)

ši jaŋji wo.
は じゃがいも です

ene ši he-ni piđži-san šin wo.
これ は 彼が 書いた 手紙 です

tši mini kielie-san-ni mutuŋ gie.
君は 私が 言った ように しなさい

tši ire-tala bi tšini idžij sayi-ne.
君が 来るまで 私は 君を 必ず 待ちます

Gura bau-se džoŋdžia osi-ne.
雨が 降れば 作物が 生長する

次のような終助詞は述語動詞の後におかれるが、それらは、文全体を受けていると考えられる。

1) 疑問 u (存在・連結動詞 wo の後では, nu), la(<啦), ba(<吧), ša(<啥).

tši gau wainu (<waine u)?
君は 元気 ですか 「こんにちは」

または, tši gau wo nu? 「こんにちは」

ene tšini šu wo ba?
これは 君の 本です か

2) 強調 aŋ, ma, ja, ša, ba, 等

bi ede qarijaŋ (<qari-je aŋ).
私は 今 帰りますよ

tši namade šixua nie
君は 私に 本当のことを(ひとつ)

kielie ma.
言いなさい よ

bi tšini ene oroŋde sayije ja.
私は 君を この 場所で 待っている よ

3) 推量 ba.

ma šifu kide(～giede) waine
マー(馬) 親方は 家に いる

ba.
でしょう

【語彙】 語彙面では、なによりもまず、中国語からの借用語の占める割合が大きいことが特徴的である。陳乃雄(『蒙古語族語言的詞彙』『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』, 1988年第1期)によれば、1980年の東郷語の調査語彙3,171語のうち、中国語からの借用語は約50%を占めている。すでに述べたように、数詞も「11」以上は中国語からの借用語を用い、接続詞、後置詞、終助詞等、文法的な機能語の借用もみられる。

gaga「兄」< 哥哥 gēge

dzondzi「錐」< 鑽子 zuànzi

xanta「下着」< 汗褸 hànā

baugu「とうもろこし」< 包谷 bāogǔ

東郷語には、『元朝秘史』(秘)や『華夷訳語』(華)等、中世モンゴル語の文献にみられて、他の現代諸方言では失われた語形がいくつか存在する。

東郷語 中世モンゴル語

abi	ebin (秘)	「伯父」
xolu-	haul- (秘)	「走る」
sugie-	sökö- (華)	「ののしる」
funi	hunin (華)	「煙、もや」

さらに、東郷語に特有の語彙としては、次のようなものがある。

asuŋ「家畜」、bayatšeu「種牛」、duli-「髪を刈る、剃る」、giedžie「紙」、tšulu「めやに」、ureu「文字」、tšinaə「明後日」

また、第3人称代名詞の he「彼」等が目立つ。

宗教関係の語には、アラビア語(Arab.)やペルシア語(Per.)からの借用語がみられる。

tšida「(イスラム教の) 経典」(<Arab. ktāb)

šeitaŋ「鬼」(<Arab. šayṭān)

asmaŋ「天」(<Per. āsemān)

【方言】 東郷語の方言としては、1950年代の調査の結果に基づいて、鎮南垣方言、汪家集方言、四甲集(龍泉)方言の区分がたてられている。しかし、方言間の主要な違いは、若干の発音および語彙に関するもので、互いの差異はわずかである。

音声的に目立つのは、汪家集方言で、捲舌音の σ が借用語だけでなく、モンゴル系の語彙にも現われるほか、「母音+ɣ」の発音が観察されることである。

蒙古文語形 鎖南坝方言 汪家集方言

üker	fugie	fugɔ	「牛」
ɣar	qa	qaɪ	「手」
naɣur	no	noɪ	「湖」
qoɣar	Gua	Guaɪ	「2」

それ以外には、ある地域ではモンゴル語系の語彙を使うのに、他の地域ではそれを借用語におきかえている、といった若干の語彙的な異同があるにすぎない。

【辞書】

布和等編(1983), 『東郷語詞彙』(蒙古語族語言方言研究叢書 008, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特)——東郷語と中国語の対訳語彙集。収録語数は、連語、成句も含めて約4千。東郷語形は国際音声字母(IPA)に基づく音声表記で、モンゴルの伝統的な「十二字頭」に準じて配列されている。モンゴル系の単語には対応する蒙古文語形(蒙古字)が、借用語には中国語、ウイグル語、アラビア語、ペルシア語等、もとの言語の語形が付されている。

栗林均編(1986), 『「東郷語詞彙」蒙古文語索引』(東京外国語大学, 東京)——上記の語彙集のうち、モンゴル系の同系語彙を抽出して、蒙古文語形の見出しのもとに索引化したもの。

【参考文献】

布和(1986), 『東郷語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書 007, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特)——東郷語のもっとも詳しい概説。音論, 形態論, 統語論, 語彙論を含み, 随所に歴史的な説明を付している。

布和等編(1987), 『東郷語語材料』(蒙古語族語言方言研究叢書 009, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特)——日常会話, 民話, 伝説, 諺, 謎々, 童謡等を含む口語資料集。IPAによる表記と, それに対応する蒙古文語形の表記(蒙古字), 中国語訳からなる。

孫竹(1985), 「東郷語実詞及其形態」『蒙古語文集』(青海人民出版社, 西寧)

Nasunbayar (1961), "Düngsiyang kelen-ü temdeglel", *Монголын судлалын зарим асуудал (Studia Mongolica, Tomus III, Fasciculus 3, Улаанбаатар)*

—— (1976), "Düngsiyang kelen-ü tuqai tobči temdeglel" 『蒙古語言研究論文集』(内蒙古師範学院中文系蒙語專業編, 呼和浩特)

Потанин, Г. Н. (1893), *Тангутско-тибетская окраина Китая и Центральная Монголия. Путешествие Г. Н. Потанина 1884-1886*, т. II (Санкт-Петербург)

劉照雄(1965), 「東郷語概況」『中国語文』1965年第2期(北京)

—— (1981), 『東郷語簡志』(中国少数民族語言簡

志叢書, 民族出版社, 北京)

Todaeva, B. H. (1959), "Über die Sprache der Tung-hsiang", *Acta Orientalia IX* (Budapest)

Тодаева, Буляш Хойчиевна (1961), *Дунсянский язык* (Издательство восточной литературы, Москва)

【参照】 モンゴル諸語, シロンゴル・モンゴル語
(栗林 均)